

グローバル・ツーリズム試論

～二国間ツーリズム・システムからみた持続可能な観光～

The Theory of Global Tourism from A Viewpoint of Tourism System

小林 裕和*

KOBAYASHI Hirokazu

2003年から強化された一連の観光政策により、2010年に訪日外客数を1000万人とする目標達成が目前に迫っている。交流人口の拡大は、日本だけでなく世界中で起きている現象であり、今後も拡大すると予測されている。その中で、観光が持続的に発展するためには、一国の観光現象を理解するだけでは不十分である。観光客の発地側の国・地域の観光のシステムと、観光客受け入れ国・地域の観光・システムの理解と、さらにその相互関係を含めた二国間のシステムの関係性を明らかにする必要がある。本研究は、多国間の観光を多角的・多面的に見る視点を提供するグローバル・ツーリズム研究を提唱し、その試論とする。

キーワード：グローバル・ツーリズム研究、ツーリズム・システム、システム理論

1. はじめに

2001年以降の省庁再編の中で初めての新しい庁として、観光庁が2008年10月に発足し、観光政策が一段と高度化されようとしている。「観光立国の実現は、21世紀の我が国経済社会の発展のために不可欠な国家的課題」との認識から、「国全体として、官民を挙げて観光立国の実現に取り組む体制が必要」として観光庁を設置し、「観光立国を総合的かつ計画的に推進」としている¹⁾。疲弊する地域経済を活性化する処方箋として、あるいは失われつつある日本文化を見直す契機として、先端技術やアニメなどの新しい日本を世界に発信する手立てとして、観光は多くの期待を持って、日本では21世紀になってやっと国家政策として本格的に進められることとなった。

このように観光政策が新たな局面を迎える中、観光研究が現実的な観光の課題解決にどれだけ貢献しているか、改めて問う必要があるだろう。訪日外客数は、2010年1000万人の目標を間近にし、2020年に2000万人とする目標も検討され始めている。今後世界の、特にアジア地域における交流人口の拡大により、日本は多くの外国人観光客を受け入れることが予測される。そのときに想定される諸課題を、観光研究は予測し解決策を提示する準備ができているだろうか。

日本においては戦後、高度経済成長時代を経てマスツーリズムの時代が到来した。国内旅行、海外旅行が大衆化し、日本の観光研究はそのような背景を受けて展開されてきた。しかし訪日外客をこれだけ受け入れるような環境は初めてのことである。観光研究の対象が変化してきている中で、これまでの分析の枠組みが見直されるべき可能性がある。

そこで本研究では、世界中で生じている国境を越えた観光現象(「グローバル・ツーリズム」と呼ぶ)を対象とし、発地における旅行を生み出すシステムと、観光客を受け入れる地域における観光のシステムと、それら2つのシステムを包含する上位システム(二国間のグローバル・ツーリズム・システムと呼ぶ)に着目し、その研究の枠組みについて考察する⁽¹⁾。

2. ツーリズム・システム理論

(1)観光研究におけるシステム理論

複雑な社会現象を、さまざまな要素と、それらが相互に関係性を持ち複雑に絡み合っているもの、すなわち、「システム」として解釈するシステム理論は、1930年頃から始まり、すでに多くの科学分野にて応用されている。システム理論は、要素還元的で線形的な見方ではなく、非線形で、全体的なアプローチを目指して

*北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻 博士後期課程

いることが特徴である。観光研究においても、観光現象をシステムとみなし、システム理論を援用して解釈する試みはこれまで多くなされてきている²⁾。例えば、旅行出発地、輸送ルート、旅行目的地、といった要素でツーリズム・システムをモデル化したもの³⁾、観光のアトラクションをツーリズム・システムのサブシステムとして説明したものなどがある⁴⁾。

グローバル・ツーリズムを解釈する場合、このような単純なツーリズム・システムは現在の観光を共時的にとらえる。つまり、観光を構成する要素とその関係性が、変化していないとみなせる範囲において説明する。しかしこのような見方だけでは、結果として現在の観光が、国や地域によって多様性（観光客の質的、量的な違い）を持つことは十分には説明しない。

ここでシステムが多様化していることは、2つの理由が考えられる。ひとつは、そのシステムの歴史的な変遷に依存するものである。もうひとつは、システムの全体性に関連するもので、観光が多層的なシステムから構成されていることである。

システムはサブシステムを持ち、あるいは自身がサブシステムとして上位のシステムの構成要素となることがある。観光の場合、発地と着地という地理的要素を持っているが、発地、着地それぞれが独自の社会・経済・文化などのシステムを持っている。例えば、グローバル・ツーリズムを見たとき、着地ではいろいろな国の観光客が訪れていることを知る。しかし、発地で抱えるシステムは発地ごとに違い、異なる二国間のツーリズム・システムが、並列的に同時に現象として生じている。着地の観光現象を解釈するには、発地のツーリズム・システムの理解が必要である。

ウォーラスティンは、「世界システム論」により、「中枢と辺境、あるいは中核と周辺という従属論での説明図式からさらに進み、ヨーロッパを中核として世界を覆いつくしていく世界システムモデル」を提示した。ヨーロッパ中心的との批判はあるが、歴史学に限られた地域のものだけでなく、アジアを世界システムに組み入れて認識する視点を提供し、一国・地域の歴史を超えて、新たな歴史研究に「大きなインパクトを与えた」⁵⁾。

ツーリズム・システムについても、一国のツーリズム・システムの理解だけでなく、グローバルの視点にとらえ、発地で観光客を押し出す理屈と着地側で受け取る理屈をセットで解釈する必要がある。特に発地の

社会・経済的な背景は、観光客を押し出す力学に大きな影響を及ぼす。そのような視点から、現在のツーリズム・システムの多様性を解釈し、持続可能な観光への貢献を解き明かすことにつなげていくことができる。

(2)二国間のグローバル・ツーリズム・システム

観光地の発展段階を観光客数から見て、観光客がまだ来ていない、増え始めた、最大化した、減り始めた、というモデルを想定してみよう。

観光客が増えるとき、発地側のシステムと、着地側のシステムの相互間での条件が影響する。発地側で、観光客を押し出す力学が働いても、受け地側に受け止める力学が働かなければ、二国間の交流は増加しない。言い換えれば、観光客の変化は、2つのシステム間の相互作用の結果である。例えば、訪日旅行のニーズの強い香港では、日本が訪日プロモーションを行い需要が拡大しても、航空機座席が不足し、思うようにツアーが作れず供給が不足する。別の事例では着地側の制度システムによる影響も挙げられる。中国からの訪日観光の場合、着地側が決める制度システム（査証制度）のため日本側が望むようには中国人観光客は増えない。

(3)持続可能な観光の多様性

持続可能な観光は、持続可能な発展の観光分野への適用としてこれまで提唱されてきた。その後、「マストツーリズムに取って代わる観光」や「責任ある観光」といったものに発展してきているが、「持続可能性」を模索している姿勢は変わらない。ただし、何の（ための）持続可能性か、ということがいままだ議論されている。例えば、欧州と第三国の関係においては、地域経済に貢献する観光であり、地域の雇用を確保する観光である。あるいは地球温暖化について、UNWTOでは持続可能な観光というよりは、気候変動とツーリズムという形で論じられている。

一方で日本における持続可能な観光の議論はまだそれほど深まっておらず、エコツーリズムなど一部の旅行形態や商品といったかたちにとどまっている。マストツーリズムの反省から始まっていることは世界の潮流と同じであるが、対象とするマストツーリズムの背景が異なっている。地域では経済の低迷が続き、定住人口が減っている。そのような状況下では、マストツーリズムを反省するどころか、だからこそ観光が注目され、より多くの観光客に来てもらいたいと考えている。実際に、観光客が来すぎて困る、ということが議論されることは、一部の地域を除きごくまれである。現在は、

マスツーリズム自体のエコ化、例えば交通機関の地球温暖化ガスの削減といったことがテーマとなっている。このように、持続可能な観光は、持続可能性としては同じ課題を持ちつつも、その背景による多様なツーリズム・システムの視点が必要となる。

3. 「グローバル・ツーリズム研究」へ

歴史学では、「グローバル・ヒストリー研究」と呼ばれる潮流がある。歴史学（世界史）がこれまで主に扱ってきたのは一国単位の歴史であったが、グローバル・ヒストリー研究では、「従来の一国史の枠組みを超えて、ユーラシア大陸や南北アメリカなどの大陸規模、あるいは東アジア・海域アジアなど広域の地域を考察の単位とする」。その背景には「現代社会に対して問題提起できなくなった歴史学のあり方を何とかしたい、そのためには、従来の一国史的な常識をとりはらって、改めて、一体化していく世界、地球社会のたどってきた途を再考してみたい、という潜在的な問題意識があるように思われる」⁶⁾という。

また、秋田(2008)⁷⁾は従来の西洋史研究を批判的にこう指摘している。「グローバル化の現代において、従来の国民国家の枠組みをベースにした西洋史研究の（ 史という）枠組みは急速に陳腐化している。日常生活史のレベルでも、一国史の枠組みで研究が完結しないことは、都市生活社会史研究の成果から明らかである。(中略)比較よりもさらに有効なのは、「関係性」を考えることだ。関係を考えるためには、モノ・ヒト・カネ・情報・知識・技術・制度などの移動・移転・移植と、その媒介項を考える必要がある。ローカル、ナショナル、リージョナル、グローバルの4つのレベルでの相互作用(interactions)を考えることが、必然的にグローバルヒストリー研究につながる。」

グローバル・ツーリズムを論じる場合に、同様な視点を援用することにより、より発展的な展開が可能である。つまりグローバル化が進み、国境を越えた交流人口が増加する中で、前章で指摘したように、発地側、あるいは着地側の観光現象を解釈するときに、双方を含めた観光研究の枠組み、あるいはパラダイムが必要になる。

実際、観光地が同じ国民だけを対象にした観光を考えるだけでは今や十分でなくなりつつある。例えば宿泊者数を見ると(2007年暦年)⁸⁾、外国人の構成比は全国平均で7%であり、都道府県別にみれば、東京都が

21%、大阪府が16%、千葉県が11%と上位3位となっている。一方、日本人の宿泊旅行はこの数年間低迷しており、国民1人当たりの国内宿泊観光旅行回数は、1.54回、対前年度比で8.3%減、国民1人当たりの国内宿泊観光旅行宿泊数は、2.47泊、対前年度比9.2%減となっている。外国人比率が今後も高まる可能性がある。

これまで日本の観光振興は、主に「国内旅行」の活性化として、「日本国民」を対象としてきた。そして2003年から「訪日旅行」として「外国人」をターゲットに組み入れた。訪日旅行をいかにして促進するか、と考えたとき、旅行者は、日本だけが目的地の選択肢ではないことに留意する必要がある。欧州発の旅行であれば、ある人はアジアを旅行しようかと考え、中国や韓国、台湾を対象として選ぶかもしれないし、あるいはリゾートに行こうと考えタイのビーチリゾートを選ぶかもしれない。その選択が実現される背景には、旅行者の社会や文化があり、知識、情報、制度などがあり、それらは日本とは違う。国内旅行を考えるときは、発地の旅行者について、そこまで考えることはない。しかし、日本において、外国人を受け入れる観光地のあり方を論ずる際には、観光客を送り出す国・地域のツーリズム・システムや、送り出す地域のツーリズム・システムと、受け入れる地域のツーリズム・システムとそれらをサブシステムとする、上位の二国間ツーリズム・システム、そして、二国間を包含するさらなる上位のツーリズム・システムが、それぞれどのような関係性と相互作用を持っているか、といったことを、より正しく、意味を持って理解する必要がある。それによって、訪日客をより増やす施策に貢献するような、国際的な観光現象を解釈する研究が可能となる。そのような視点からの研究を、「グローバル・ツーリズム研究」と呼ぶ。

4. グローバル・ツーリズム研究の展開

グローバル・ツーリズム研究が取り組むべき課題は多くあるが、ひとつの課題を例示する。

訪日外客を獲得した結果、日本が、あるいは日本の社会がどのように変容していくか、ということを考える。「グローバル化」はヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて盛んになることである。同様に、観光におけるグローバル化を考えることができる。そのときに日本が海外と、より同質化するのか、あるいは、日本のアイデンティティを強化することに

なるのか、あるいはその両面があるのだろうか。

再び歴史学の視点を借りれば、「19世紀から20世紀初めにかけての歴史学は国民国家の形成と確立のためにぜひとも必要な学問であり、間違いなく「実学」だった⁹⁾という。つまり、歴史として「国家国民」としての国の歴史を描き出すことが、それを実体として、存在が強化される、歴史学がそういう風に使われた、ということである。同様に、訪日旅行を意識するとき、日本のよさを海外に知ってもらふ、ということは、訪日旅行という存在の意識を強化することにつながっている。インバウンド旅行の促進自体は、もちろん現代では多くの国で行われているし、訪日旅行による経済効果、あるいは「日本のよさを再発見する」という、よくいわれるような意義もある。しかし、日本に呼び寄せることを強化することのみが、本当に訪日旅行を強化することにつながるかどうかは、踏み込んで議論する必要がある。つまり、日本を意識することは、日本のよさを壊されたくない、だから日本人観光客が来てくれればいい、という、「反訪日旅行」を無意識のうちに醸成することにならないだろうか。そのような意識と、「日本のよさを知ってもらいたい」という意識との境界はどこにあるのだろうか、という問題意識である。訪日旅行政策が進んだとしても、実際に外国人を受け入れる個々人の意識レベルが変わらない限り、今後更なる訪日客獲得にはつながらないのではないだろうか。このようにグローバル・ツーリズム研究では、一体化する世界における観光の視点から、これまで見落としてきた課題に取り組む枠組みを提示していく。

5. 考察

持続可能性を実現するためのシステム論的な要件とはなんだろうか。観光地のライフサイクル理論を見れば、少なくとも自動的に未来永劫観光が続くという担保がされないことはわかる。しかしその発展段階では、あるときにはポジティブフィードバックが働き、マスツーリズムが続く。ひとつの経営主体であれば、再投資による再生産も可能である。しかし面的な広がりを持つ観光地というシステムが、常に観光客を魅力し続けるためのしゅみを内在させるには、そこに「意思」が必要となる。なぜならば、観光地にはマネジメント主体も、自律的なシステムも所与の条件として付与されていないからである。一度観光客が押し寄せ、口コミやマスコミなどを通じて広報効果が生まれ、それに

便乗して旅行会社が商品を作り流通に乗り、その結果観光客がさらにふえ、また口コミにつながる、といったフィードバックが生まれれば、しばらくはツーリズム・システムは維持される。しかしそこにシステムの構成要素の代謝がなければ、いずれそのシステムは機能を停止する。経営体であれば再投資ができるが、観光地域システムでは、それを担うのが、行政か、NPOか、住民か、あるいは企業か。その機能の検討については別の課題としたい。

6. おわりに

本研究では、観光を、多種多様な要素とその関係性からなるシステムとして捉え、これからの国際的な大交流時代を見据えたときには、国境を越えた観光現象を扱う場合、一国で通用する観光をみるだけでなく、多層的なシステムを扱う見方、「グローバル・ツーリズム研究」が必要であることを提唱した。今後、観光研究が日本の観光をそして世界の観光をリードするためには、グローバル化を視野に入れた理論的枠組みを議論し発展していく必要があるだろう。

【補注】

(1)「ツーリズム」と「観光」という用語について、本論文では、文中に使う場合には双方を観光やビジネス目的の旅行を総称して用い、分けて使わない。ただしシステムやグローバルなどの英語をそのままカタカナで用いる単語と一緒に使う場合には、「観光」ではなく「ツーリズム」を使用した。

【参考文献】

- 1)観光庁：<http://www.mlit.go.jp/kankocho/about/setsuritsu.html>
- 2)Hall, Michael(2005):*Tourism*, Person Education Limited,p.60
- 3)Leiper,Neil(1979):The Framework of Tourism, *Annals of Tourism Research*,Oct/Dec, pp.390-407
- 4)Leiper,Neil(1990):Tourist Attraction Systems, *Annals of Tourism Research*,17, pp.367-384
- 5)水島司(2008):グローバル・ヒストリー研究の挑戦、グローバル・ヒストリーの挑戦、p.6
- 6)秋田茂(2008):グローバル・ヒストリーの挑戦と西洋史研究、パブリック・ヒストリー、5、pp.35-36
- 7)秋田茂(2008):p.41
- 8)平成20年版観光白書、国土交通省
- 9)羽田正(2008):「イスラム世界」と新しい世界史、グローバル・ヒストリーの挑戦、p.68